

祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報

第85号

# てんまつんじん



御迎え人形「鎮西八郎為朝」(大阪府指定有形民俗文化財)

- てんまつんじん梅まつり…………… 3頁
- 天神祭 in ルーマニア…………… 4頁
- 長澤孝三先生 御蔵書の奉納…………… 5頁
- 沖繩なにわの塔 慰霊祭…………… 6頁
- 境外の天満宮・天神祭(上)  
天満市場の天神祭 図絵…………… 7頁
- 天満天神研究会の再開…………… 10頁
- 天満の天神さんと私(6)  
箕輪俊彦さん&いちのすけ…………… 11頁

## 表紙解説 御迎え人形シリーズ① 鎮西八郎為朝

本号から前期号（四月～五月）の表紙では、「御迎え人形」をご紹介することになりました。後期号（九月～十月）の表紙は、これまで通り当宮所蔵の「天神画像」シリーズです。

### 御迎え人形と芝居と疫病

初めに御迎え人形について、簡単に説明しておきましょう。

江戸時代の天神祭では、難波橋あたりから船渡御の船列が戎島町（大阪市西区）の御旅所へ下航し、一方、戎島付近の町々からは船渡御を奉迎するための御迎え船の船列が難波橋へ廻行しました。やがて、元禄期（一六八八～一七〇四）になると、御迎え船には、豪華絢爛の「御迎え人形」が飾られるようになり天神祭の花と賞されました。

江戸後期の弘化三年（一八四六）の『天満宮御神事御迎船人形図会』には、四十四体もの人形が挿絵入りで掲載されています。このうち現存するのは十六体で、大阪府の有形民俗文化財に指定されています。左に人形名と、カッコ内に所有の町名を

記しておきます。

三番叟（富島二丁目）、雀踊（江之子島西之町）、安倍保名（安治川二丁目）、与勘平（安治川上壱丁目）、酒田公時（江之子島東之町）、関羽（江之子島東之町）、胡蝶舞（江之子島東之町）、鬼若丸（江之子島東之町）、八幡太郎義家（江之子島東之町）、羽柴秀吉（木津川町）、狸々（上博労町）、素盞鳴尊（戎島町）、鎮西八郎（木津川町）、佐々木高綱（木津川町）、木津勘助（天満屋敷）、豆蔵（木津川町）

これらの御迎え人形には、二つの共通点があります。一つは、当世人の芝居の登場人物から採っていること、いま一つは、人形の衣装のどこかに緋色（濃く明るい赤色）を着せていることです。緋色は疫神（特に疱瘡神）が嫌うと信じられていたから、疫病退散を願う夏祭らしい趣向だったのです。

### 鎮西八郎為朝と疫病

表紙の鎮西八郎為朝は、平安末期に活躍した武将・源為朝（一一三九～一一七〇）のことです。源為義の八男で、有名な頼朝や義経の叔父にあたります。

『天満宮御神事 御迎船人形図会』



強弓の乱暴者だったことから、父の為義によつて九州へ追放され、鎮西（九州）八郎と名乗ったといい、芝居『鎮西八郎降魔鎧』、『鎮西八郎誉弓勢』などでも「鎮西八郎」の名で活躍します。

保元の乱（一一五六）では、父・為義とともに崇徳上皇方に味方して奮戦しましたが、後白河天皇方についた兄・義朝に敗れ、伊豆大島に流されました。しかし、為朝は次第に伊豆諸島に勢力を広げたため、伊豆の国司に追討され、八丈島で自刃したと伝えられます。

江戸時代になると、江戸の町に疫

病（疱瘡＝天然痘）がたびたび流行しますが、なぜか八丈島には感染しなかったことから、為朝は疱瘡神と信じられるようになりました。この人形の着付け（上着）が緋羅紗であることも意味深く見えてきます。

### 御迎え人形のレプリカ



現存する御迎え人形十六体については、去る平成十四年（二〇〇二）の「菅原道真公御神退千百年大祭」を記念して、平成十二年から二十七年にかけて、レプリカを謹製し、授与所にご用意しています（授与料五千円）。

令和九年（二〇二七）の「菅原道真公御神退千二百五十年式年大祭」に向けて、ご家庭に職場にお飾りになつては如何でしょうか。

## 第二十一回 盆梅まつり

### 盆梅と刀剣展

二月十日から三月三日にかけて「第二十一回てんま天神梅まつり」を開催いたしました。本年は、新型コロナウイルスが五類感染症になってから初めての「梅まつり」となりました。

例年の如く、当宮の書院造り百畳敷きの参集殿に、樹齢二百年を越える古木をはじめ、五十余鉢の盆梅を

展示させて頂きました。

また、第十五回からは「盆梅展」に合わせて「刀剣展」も併催し、好評をいただいておりますが、今回も「天光丸」「金銅造御太刀」など十二振りの刀剣を展示しました。

参集殿を出ました境内には、草木染めなど多くの出店も頂き、梅まつりの賑わいを増していただきました。今年は例年になく温かかったため梅の開花も早く、初日から見頃の鉢が多く見受けられました。

気候にも恵まれ、感染症の鎮静化も見通せるなか、多くの方々に拝観頂きましたこと、喜んでおります。



### 境内七不思議巡り

「てんま天神梅まつり」に協賛して、ボランティアガイド・天満天神御伽衆による「境内七不思議巡り」も開催されました。

平安中期以来、千有余年の歴史を誇る当宮には、なにげない情景に興味津々の由来が潜み、日ごろは気にも留めないスポットに奥深い歴史が秘められています。それらの内の七カ所をご案内する企画でした。

週末・祝日の六日間(二日二回)に開催しましたところ、計二百九十五人のご参加をいただきました。六日のうち二日が雨天でしたから、まずまずの集客だったといえそうです。



## 戦略的パートナーシップの締結

昨年（令和五年）十一月四日・五日の二日間、東欧のルーマニア・ブカレスト市の国立劇場において、当宮の神職及び「鳳講」「天神講獅子」「地車講」の皆様と、天神祭の一部を齎行してまいりました。



## 天神祭 in ルーマニア

昨年の三月、ルーマニアのクラウス・ヨハニス大統領が来日、岸田文雄総理大臣との首脳会議の結果、二国間に「戦略的パートナーシップ」が結ばれました。それを記念して、十一月を「日本文化月間」と定め、その皮切りに「天神祭 in ルーマニア」が開かれたのです。

## 神事および神賑行事

劇場の舞台上に設けられた祭壇で神事が修され、神楽「珍しの舞」を御奉仕させて頂き、会場は厳かな雰囲気にも包まれました。

寺井種治宮司は、締結されたばかりの「戦略的パートナーシップ」を踏まえて、日本・ルーマニアの友好関係の発展、来場者及びその御家族の健勝を祈る内容の祝詞を奏上されました。

そのあと、「鳳講」の皆様が登場されますと、会場はそれまでとは打って変わった賑々しい空間に変わりました。



鳳講は、本来の天神祭では一・三トンの鳳神輿でご奉仕されていますが、今回は子ども神輿を持ち込み、現地の大学生たちの協力を得て、舞台上を縦横無尽に練り歩きました。

続いて「天神講」の皆様による獅子舞が、厄除け無病息災を願って、参加者の頭を囓んで廻り、喝采を浴びました。

さらに「地車講」の皆様は、地車囃子にあわせ「龍踊り」を奉仕し、参加の方々にも舞台上に上がっていただき、皆で一緒に踊りました。

プログラムの終演には、満場総立ちの会場に大きな拍手喝采が響き渡りました。

スタンディング・オベーションの後は、国立劇場前の広場において、鳳講・天神講・地車講の体験会を行い、ルーマニアの方々との交流を深めました。





参加された現地の日本人ご家族が「久々に日本の文化に触れて、感慨深く、涙が出てきました」とお話しいただきました。

海外における天神祭は、平成六年（一九九四）のオーストラリア・ブリスベンにおける天神祭に続いて二回目、ヨーロッパでは初めての経験でした。

前回のブリスベンは、関西国際空港の開港を記念して、今回は両国の「戦略的パートナーシップ」締結を記念してのことでしたが、これから



も、国際親善にお役に立てる機会があることを楽しみにしています。



### 長澤孝三先生 御蔵書の奉納 近藤南州関係書

このたび、長澤孝三先生から、大部の御蔵書が当宮に奉納されました。先生は、国立公文書館に長く勤務された著名な書誌学者ですが、実は、もう半世紀も昔、昭和五十二年（一九七七）十月刊の『大阪天満宮御文庫漢籍分類目録』の作成に、長澤規矩也・ちづ様とともに大変なご尽力をいただいた方でもあります。

去る令和六年四月九日、本殿において、奉納奉告祭を斎行し、式には、遠く神奈川県にお住まいの先生に代わって、当宮文化研究所の高島幸次と鈴木幸人が参拝しました。

御奉納いただきました二百部を超える御蔵書は「近藤元粹関係著編書」と「明治期刊行童蒙書」の二群からなります。近藤元粹（号は南洲。一八五〇～一九二二）は、当宮に近い旅籠町（現、北区南森町一丁目）に「猶興書院」を開き、長年にわたって漢学の教授に専念した漢学者です。没後に、その門人達によって元粹の蔵書二万余巻が当宮に寄進され、「天満宮第二文庫 南州近藤先生遺書」の名で大切に収蔵しています。また平成十八年（二〇〇六）には、

古典籍商・中尾松泉堂書店の中尾堅一郎様、中尾書店の中尾良男様から元粹の自筆史料を含む三百余冊が奉納されています。

このような当宮と近藤元粹の深い関係を踏まえて、このたびの長澤先生からの奉納となった次第です。

また、『幼学綱要』『婦女鑑』などからなる明治期の「童蒙書」群も、学問の神様である当宮にふさわしい蔵書と有難く受けとめています。

今後は、貴重な「長澤孝三先生蔵書」をどのように公開、活用するかが当宮の課題だと考えています。



なお、長澤先生は、最後の内閣文庫長として「幕府のふみくら内閣文庫のはなし」（吉川弘文館、二〇二一年）を上梓されています。本好きの方には大変興味深い内容です。ご一読をお薦めいたします。

沖繩「なにわの塔」慰霊祭へ参列

令和六年二月十九日から二月二十一日の日程で神道政治連盟大阪本部主催「第十二回沖繩なにわの塔慰霊祭」に参列しました。

「なにわの塔」は、沖繩において戦没された大阪府関係者を追悼するため、沖繩摩文仁の地に昭和四十年に建立、昭和四十四年には南方諸地域戦没者もあわせて、三万五千余名が祀られています。



今回総勢三十名程の参加、大阪天満宮からは宮司以下四名が参加しました。

一日目は、波上宮・沖繩県護国神社・普天満宮の正式参拜。二日目は、なにわの塔での慰霊祭斎行。その後、平和祈念公園資料館でジャーナリスト中村覚氏と琉球王国尚本家当主尚衛氏の講話を聴講。三日目は沖繩県立博物館美術館を見学、辺野古海岸を車窓視察し、全行程を終了しました。



沖繩では近年、都市開発や観光地発展の一方で、神社として景観の著しい変化が懸念されると伺いました。また二月でもすでに暑く視界に広がる海は夏を彷彿させる美しさで、そこに戦争の傷跡を感じることはありませんでした。

しかし、慰霊祭で厳かに読み上げ

られた祝詞、そこでは戦下のきびしい状況や戦地に向かう若者の心情が詳細に奏上され、その時の情景が目に見え、浮かぶようであり戦争の悲惨さを痛感いたしました。慰霊祭参列を通じ得がたい経験と学びをさせていただきました。当たり前に享受している平和が多く、尊い犠牲の上に築かれていることをあらためて感じました。

(長谷川将大)

大阪天満宮献詠 風月社  
令和五年十月 / 令和六年三月

令和五年

十月兼題 菊

うるはしき秋をことさらにははする

懸崖したて菊そのめくり

佐野 秀子

野の菊に心ひかる己が身に

まことの意味を知る齡となり

松村 曉二

十一月兼題 木枯

大空に月冴えわたる白き庭

木枯らしの音しじまをた、く

大北 滋保

赤き実を梢に残す花水木

葉のひらひらと木枯らしにまふ

忠津 清治

十二月兼題 歳晩

幾重にも重ぬる里の山々に

霧立ちのぼる歳晩るる朝

鈴木 敬子

歳晩を相國寺にて坐禅組む

夢想疎石の庭に向かひて

家治 綾子

令和六年

一月兼題 鏡

久々に戻りて共におるがむる

孫の真顔をうつす神鏡

北岡 由紀子

母が手で小さかざる鏡餅

年の初めを祝ふ幸せ

中瀬 央子

二月兼題 梅

こちふきてひなみにそへる白玉の

つぼみいきづく梅の里山

坂井田 礼子

子らの声弾ける園に梅の風

さやかに吹きてふらここ揺らす

乾 恵子

三月兼題 顔

父母のいのち継きたし八十路過ぐ

歳増すことに顔の似かよる

伊藤 涼子

勇ましくも猛き心を内に秘む

土俵溜まりの力士の顔は

南口 一二美

境外の天満宮・天神祭 ⑤

天満市場の天神祭 図絵

今回は活気あふれる浪速の台所・天満市場でご覧になれます天神祭のアートをご紹介します。

まず、天満市場正面入口の頭上に見えますのが、幕末の大坂の名所を描いた浮世絵『浪花百景』の内の『天満天神地車宮入』をもとにした壁画です。これは昨年（令和五年）の三月十五日に「ぶらてんま」の外壁工事完了後に設置されました。地車講・講元である河部宏之様にとって念願の企画であり、講の本拠地天満市場を鮮やかに彩っています。

次に、入口からエスカレーターで



天満市場正面入口の『天満天神地車宮入』



澤内浩一様による天神祭水彩画

地下一階に降りると、右手に見えるのが、天神祭を描いた水彩画の数々です。これらの絵は、地下一階「マイクックまいど」の店主であり画家でもある澤内浩一様の作品です。澤内様は、平成十六年に当宮に水彩画『天神祭』をご奉納いただきました。画家上田素久様の門下であり、毎年天神祭をテーマに描いておられます。天満市場には、この他にも、当宮や天神祭に関わるアートがたくさんございますので、お買い物の際には、ぜひご覧くださいませ。

(仲真矢)

社務所 電話番号だより

よくあるお問い合わせ

『かしわ手と手打ち』

「二拝二拍手一拝」はご存じかと思いますが、神社を参拝する時の敬礼作法のひとつである「拍手」は「かしわ手」ともいいます。

二拍手の他に一拍、四拍、八拍することがあり、一拍手は「礼手」といって盃を取る前や盃を置いた後に感謝の意味を表す作法で、一拍、二拍までを短拍手といえます。四拍手は出雲大社をはじめ少数の神社で用いられます。八拍手は「八平手」という特殊な打ち方をする場合に用います。

これは伊勢の神宮や熱田神宮の祭儀に用いられます。四拍手と八拍手と手は長拍手といえます。

一方、人と人との間でも拍手は行われます。古代においては王や貴人に対する敬礼作法として拍手をしたようですし、現代でも人を称える意



味での拍手はいろいろな場面で行われています。少し意味は異なりますが、人と人との約束や協議が成立した時を「手を打つ」と言いますが、実際にこうした場面では「手打ち」（関東では「手締め」と言います）を行います。

場面としては、お互いに喜ばしい事柄であり、おめでたい祝い事にながっているという祝賀の意味で手打ちを行うことや、締め括りの場面でも行うようになりました。

祭りもそのひとつであって、天神祭でもあちこちで手打ちが交わされます。天神祭の手打ちは「大坂締め」という打ち方で、堂島の米相場での手打ちが元になっているとの説があります。神様のお出ましを祝い、互いの繁栄を祈りながら、あちこちで手打ちを交わします、面識の無い者同士が同じ祭りに奉仕する喜びを称えあうことよって一体感を得ることもできます。

このように「拍手」はお祝いであったり挨拶であったり、敬礼作法ともなります。様々な場面で神様を意識する習慣がある日本人にとっては、さしずめ『お客さまも神様です』といったところなのでしょう。

## 大阪天満宮の

### お掃除十周年によせて

日本を美しくする会  
大阪掃除に学ぶ会

先日の令和六年四月二十一日(日)に私たち「日本を美しくする会・大阪掃除に学ぶ会」では、大阪天満宮の本殿ならびに境内とトイレをお掃除させて頂きました。この活動は、今から十年前の平成二十七年に大阪天満宮氏子総代の盛岡淑郎様に繋いで頂いたご縁から始まっており、本年度は節目の十年目となりました。



当会は毎月、大阪府下の神社や学校をお借りして、お掃除活動を続けておりますが、大阪の顔である「天神さん」のお掃除が出来ることは、有難く、誇りにさえ感じます。途中にはコロナ禍もありましたが、ここまで続けられたことは神職のみならずのご理解とご協力のお陰であり、当会の会員さんの尊き志のお陰と、心から感謝申し上げます。十周年の活動参加者数は、三十四名ですが、遠くは京都・和歌山からお越しくださいました。誠にありがとうございました。

早朝六時には開門をしていただき各自が受付を済ませた後、六時半には開会式を執り行いました。当初は雨もパラついておりましたが、お掃除を始める段になると、ピタッと雨はやみ、お天道様も味方に付いてくれました。

お掃除は六班に分かれて実施しましたが、本殿やトイレ班では日頃は少し目の届きにくい、例えば「棧」「排水溝」などを中心にきれいにしました。目の届きにくいところを净化するとその周辺の邪気が払われて、空気が透き通る気がします。一方、境内班は境内に広がるクスノキの落葉をかき集めました。神職様に



ら六名の方に感想を一言頂きました。その一部をご紹介しますと、「十年間続けて参加できること自体が有難いことです」や「目の届かないところを磨いてきれいになっていくところを見ると嬉しくなる」等、お掃除は気持ちの宝庫だと実感します。また掃除は「動の座禅」であり、心が落ち着くとともに感性が磨かれるのだろうと感じます。

閉会式のあとは本殿にて恒例の正式参拝をさせて頂きましたが、今年も十年前の節目をお祝いしていただき、大阪天満宮様から「ご丁寧な「感謝状」まで賜りまして、そのお心遣いに恐縮しております。決して掃除の功德を過度に期待して当会は活動しているわけではありませんが、周りの方のお役に立つ生き方をして、参加者の人生が少しでも豊かになるようにこれからも喜んで当会の活動を続けて参ります。今後も、一人でも多くの方にお声掛けをして大阪天満宮のお掃除の会が「大阪の風物詩」となる日を目指します。そしてこの良きご縁に心から感謝して、未永くご指導・ご支援を賜りますようお願いして御礼の言葉とさせて頂きます。

この日は、掃除開始から道具の後片付けまでを含めて約九十分の間ですが、閉会式では参加者の中から

(大阪掃除に学ぶ会  
代表世話人 下正晴)



## 境内での皆様の活動 戎門朝のラジオ体操



戎門でのラジオ体操

本誌7頁では、「境外」における当宮や天神祭に所縁の場所を取り上げていますが、こちらでは「境内」での活動をご紹介します。

毎週月・火・木・金曜の朝、午前八時四十五分から、境内南西、戎門のところで、ラジオ体操が行われています。

およそ四十年あまりも続いているとのこと、当宮にとって朝の風物

詩のごとくであり、毎朝ご参拝になる方でしたら、ご覧になられたことも多いのではないかと思います。

このラジオ体操は、戎門前に社屋を構えられ、当宮にも篤い御崇敬をいただいている川村義肢株式会社様を中心となられて行われています。

通勤途中の一般の方が参加したり、はたまた、当宮駐車場係員も加わったりと、左の写真のように、いつも十名程の参加者がありますが、飛び入り参加も大歓迎のことです。

朝のご参拝の折、あるいは出勤前の皆様も一度参加されてみてはいかがでしょうか。

(仲真矢)



川村義肢(株) 工房てんま

## 令和六年 浪速菅廟吟社詠草

雪後 松村暁二撰

### 一月課題 御題 和

豊陽 荒木 英一 奈良市

列聖盡心祈泰平 慣聴歌吹樂餘生

霸王誇示外征力 君國仁風紅旭明

《訓読》列聖心を尽くし泰平を祈る、

歌吹を聴くに慣れ余生を樂しむ、霸王誇示する外征の力、君國は仁風紅

旭明かなり

《通釈》古来よりこの方、世を憂う

る人々は泰平を祈ってこられた。人は歌をうたい平和になれて余生を樂

しんでいたが、他國の霸王というべき武力を誇示する力で乱れておりま

すが、我が君國は仁なる國なれば日の丸の旗が紅く掲げられています。

二月課題 寒夜讀書

苔菴 揚田 崇徳 三原市

寒夜一燈下 緋書青史遙

却懷身世事 識是志難消

《訓読》寒夜一灯の下、書を繙けば

青史遙なり、却つて懷う身世の事、識んぬこれ志消え難し

《通釈》寒気の厳しい夜、書物を照らす灯り。歴史書を紐解けば遙か昔

に誘われます。ふり返つて我が身を

思えば、志の消えずに遺っているナ

ア。

三月課題 早春詩筵

琴鈴 和田 啓子 伊丹市

早春誘友醉芳筵 幽艶梅花將欲妍

關句論詩金谷興 忘憂一日染吟箋

《訓読》早春友を誘ひ芳筵に酔う、

幽艶たる梅花將に妍ならんと欲す、句を關わせ詩を論ず金谷の興、憂いを忘れ一日吟箋を染む

《通釈》早春のひとつ日友を誘つて芳筵(詩筵)を樂しめば、梅の花は美しく咲きにおい、句を競つたり詩を論じたり、昔、金谷園という場所で詩会をしたように、憂いを忘すれたのしみでした。※唐の昔、金谷園は宴で有名な所だったそうです。

四月課題 清明小旅  
貴山 忠津 清治 八尾市  
暖日輕裝草履從 羊腸一徑倚孤筇  
《訓読》暖日輕裝にして草履に從う、羊腸の一徑孤筇に倚る、墓前参拝す  
春光の里、近景の丘山碧翠重なる  
《通釈》暖かな初夏の一日身は輕裝、人の後に従い、羊腸の小徑を杖をついて行く。先祖のお墓詣りをすませ、四方の丘山は深緑が重なっている。※清明の休日にはお墓詣りが習慣となつていそうです。

## 高坐招魂社 例祭

令和六年四月九日午後二時、境内北側の星合池畔に鎮座する高坐招魂社にて、春の例祭を斎行しました。

このお社は、平成二十九年十月に公益社団法人上方落語協会会長であった六代桂文枝師の発意によって創建されました。

同協会が昭和三十二年に設立されて以降、上方落語の興隆に努められた落語家の方々の御霊を奉斎して感謝の誠を捧げたいとの思いから創建され、春には例祭を、秋には前年に帰幽された御霊の合祀祭を斎行するとともに、協会の隆昌と技芸の上達を祈願しています。

今年の例祭には、笑福亭仁智会長と寺井種治宮司をはじめ、桂文福さん、桂文之助さんらの協会員が参列されました。

そもそも上方落語は、江戸中期の京都・北野天満宮で滑稽な辻噺を披露した露の五郎兵衛（一六四三？～一七〇三）を「京落語の祖」とし、大阪の生國魂神社における軽口噺で人気を集めた米澤彦八（？～一七一四）を「大阪落語の祖」とします。その後、江戸後期には、上方落語



中興の祖とされる桂文治（一七七三～一八一六）が坐摩神社の境内で常打ちの寄席を開き、現代の寄席落語に発展していきます。そして、明治から昭和二十年ころまでは当宮の北門あたりには、「天満八軒」と総称される各種演芸小屋が軒を連ね、一大演芸街として殷賑を極めました。このように、落語の成立・発展は神社の境内とともにあり、その伝統を受け継いで、平成十八年（二〇〇六）には、当宮北門を出たところに「天満天神繁昌亭」が開館したのでした。繁昌亭にお越しの際には、御本殿と高坐招魂社にお参りしていただければと存じます。

## 天満天神研究会の再開

来る令和九年（二〇二七）の「菅原道真公御神退千二百五十五年式年大祭」に向けて、「天満天神研究会」を再開いたしました。

同研究会の始まりは、もう四半世紀も昔にさかのぼりますが、平成十四年（二〇〇二）の「御神退千二百五十五年式年大祭」に先立つ平成十年に、近隣の大学教員やミュージアム学芸員などにお声がけし、二十五年に一度の式年大祭を奉祝する研究成果を生み出したいとの思いから研究会を発足させたものです。

平成十年三月から十三年六月にかけて全十二回の研究会を開催し、毎回二十名近い参加者が侃々諤々の議論を重ねた成果は、平成十三年十一月に思文閣出版から刊行した『火と水の都市祭礼 天神祭』に結実しています。

そしてこの度、三年後の「千二百五十五年式年大祭」を見据えて、第二期の研究会を再開することになったのです。その第一回は昨年十二月八日、第二回は本年三月十五日に、文華館三階において開催しました。その概要を下に記録しておきます。

### ● 第一回 研究会

#### 研究発表

新資料紹介―変り型の天神画像と

芝居絵扁額

鈴木幸人

梅枝天神像や菅家繁盛図、歌舞伎芝居扁額等、絵画資料を紹介解説。

今後の研究会方針（論集図録作成、展示会開催等）、現在計画中の宝物収蔵施設についても話題提供した。

### ● 第二回 研究会

#### 研究発表

① 架蔵「天神信仰」資料紹介―「牛乗り天神」図、その他― 竹居明男  
発表者が所蔵する天神信仰関係の資料二十点を持参して紹介。特に文政十二年（一八二九）の曲水亭歌流『牛乗り天神』は出席者の関心を引いた。

② 伝承と史料と説話と―大阪天満宮の場合― 高島幸次

従来の日本史研究において、等閑に付されることが多かった「神社伝承」について、当該期の文献史料による検証の方法論を提示した。

第一・第二回の出席者は、鈴木幸人、高島幸次、竹居明男、竹嶋康平、永原順子、西山由理花、林潤平、増井正哉、町田大悟、松浦清、横山恵理。

## 天満の天神さんと私

箕輪俊彦さん&いちのすけ

二助企画は「あきらめない気持ちが大切」をショーのテーマに掲げ、千年受け



継がれた「日本伝統芸能猿まわし」を継承しております。

大阪天満宮での猿まわし公演は平成二十九年（二〇一七）から始まり、今年で七年目となりました。若いトレーナーたちも天神さんに見守られながら、芸を磨き、天満の天神さんのもとで公演できることの感謝と歴史を自然と学んでおります。



猿まわしは、菅原道真公の御霊を鎮めるために行われてきた様々な伝統芸能の一つです。猿まわしの歴史は決して順風満帆なものではなく、世界大戦渦中に一時途絶えますが、伝統を絶やさぬように戦後の復活まであきらめずにタスキを繋いだ先人の心が、猿まわしの歴史にも刻まれております。

参拝客がお猿さんを見つけたときに、お顔がパツと笑顔になる瞬間、お猿さんがお辞儀した時に自然に湧き上がる拍手や大技を成功させた時の盛り上がり、天神さんの元でお猿さんを中心に皆様の気持ちが一つになるのを嬉しく思います。



魔が去る、厄が去る、災難が去る、何事にも勝るともいわれる縁起の良いお猿さんとともに、これからも観ていただいた皆様の心が満たされ癒やされる事を願っております。

## 天満宮スカウト活動日誌

◆ボーイスカウト大阪第九十八団

九月 ビーバー隊が遊具ハイク。花園中央公園にて楽しく遊びを育んだ。カブ隊パター手作り工作。

十月 ビーバー隊やきいも作り。新聞紙やアルミホイルに包んで焼き美味しくできた。

十一月 ビーバー隊・カブ隊石清水八幡宮ハイク。参拝後、モルック大会。ボーイ隊ドームテント設営。



十二月 ビーバー隊クリスマス工作。カブ隊ロープ結索、歩測の練習。

一月 ビーバー隊は鶴見緑地公園屋内プールで水鉄砲やスライダーで遊び寒さに負けない体作りをした。

二月 ビーバー隊・ボーイ隊・ベンチャー隊の合同スポーツ大会。ドッジボール、リレーやしつぽ取等、どの競技も白熱した。

三月 ビーバー隊体験工作。ボーイ隊は平磯海釣公園にて海釣り、BBQをした。

◆ガールスカウト大阪府第八十一団

活動内容により年代別や団全体で集会をします。

春 低学年部門はおにぎり弁当、高学年部門はカレーを自分達で作ります。中高生は低学年部門の補佐の他、今年夏に行なわれる富士登山に向け中山寺ハイキングコースを複数回縦走し体力づくり。

夏 団独自プログラムの梅シロップ作り。梅を一粒ずつ扱い時間をかけ丁寧にジュースを作り上げます。



秋 団全体でお芋掘りの他、小学生は各部門で大阪城歴史探訪や安治川探検。

冬 お餅つき。中高生はメニュー立案から調理までを担当。他に団全体で巻きずしも作ります。

小学生から大学生まで楽しく活動しています！

# 広報室だより

## 『天神祭限定授与品』

夏季限定（六月～八月）の授与品をご紹介します。

多種多様な授与品がある中で、最近神社仏閣で話題に挙がっている『切り絵』に焦点を当てました。日本三大祭の一つである火と水の祭典『天神祭』。

熱気溢れる陸渡御・絢爛豪華な船渡御・迫力満点の奉納花火を色鮮やかな切り絵で表現しました夏季限定の天神祭朱印帳です。この限定朱印帳には開始頁に特別朱印として『神輿と船』付きの限定朱印となり御朱印料を含み二五〇〇円の初穂料でございます。

また、この天神祭御朱印帳デザインをモチーフにした『昇運守』が昨年より頒布開始となりました。こちらは神輿を担ぎ上げるが如く『運氣上昇』させるよう祈願し



た御守で、天神祭では菅原道真公ご神体を選ず「御鳳輦」の台紙にセツトされており天神祭らしさを全面に表現しております。一〇〇〇円の初穂料でございます。

この授与品

とは別に天神

祭記念授与

品としまし

て『天神祭

Tシャツ』

（初穂料二

五〇〇円）と

『天神祭トートバッグ』（初穂料一

五〇〇円）もございます。ともに天

神祭を盛り上げるべく、当宮へお参

りされる際には是非参拝の記念とし

てお受けくださいませ。



## 人事任免

### 《新任》

令和六年一月二十五日付

顧問 南野伸一

令和六年四月一日付

顧問 栗原宏武

文化研究所研究員 鈴木幸人

〈座右の銘〉

人の世にまことたつべく

現身にまことたつべく

出仕 柴田沙南

〈座右の銘〉

初志一貫

出仕 奥田誠也

〈奉職の句〉

朝食は御食神酒塩水いざ出陣

出仕 大須賀弓菜

〈座右の銘〉

思い立ったが吉日

事務職 藤田典花

〈座右の銘〉

私のマイペースは

かなりハイペース

事務職 才賀崎励緒

〈奉職の句〉

天満宮神の道を学び取る

巫女 榮万緒

〈好きな四字熟語〉

桜梅桃李

巫女 森下爽子

〈好きな四字熟語〉

一日一善

### 《退任》

令和六年三月三十一日付

巫女 笹尾真鈴

## 編集後記

本号から表紙に「菅原道真公御神退千二百二十五年式年大祭」のロゴタイプを掲出しました。

天神様・菅原道真公が、延喜三年（九〇三）二月二十五日に薨去されてから、来る令和九年（二〇二七）は千二百二十五年目にあたります。この式年大祭を機に、菅公の御心の継承をより一層強く心掛けたく願っております。

大阪天満宮社報

てんまてんじん 第85号

令和6年5月20日印刷

令和6年5月25日発行

発行人 寺井種治

発行所 大阪天満宮社務所

〒530-0041 大阪府北区天神橋2-1-18

TEL 06-63353-0025

印刷所 木村印刷株式会社